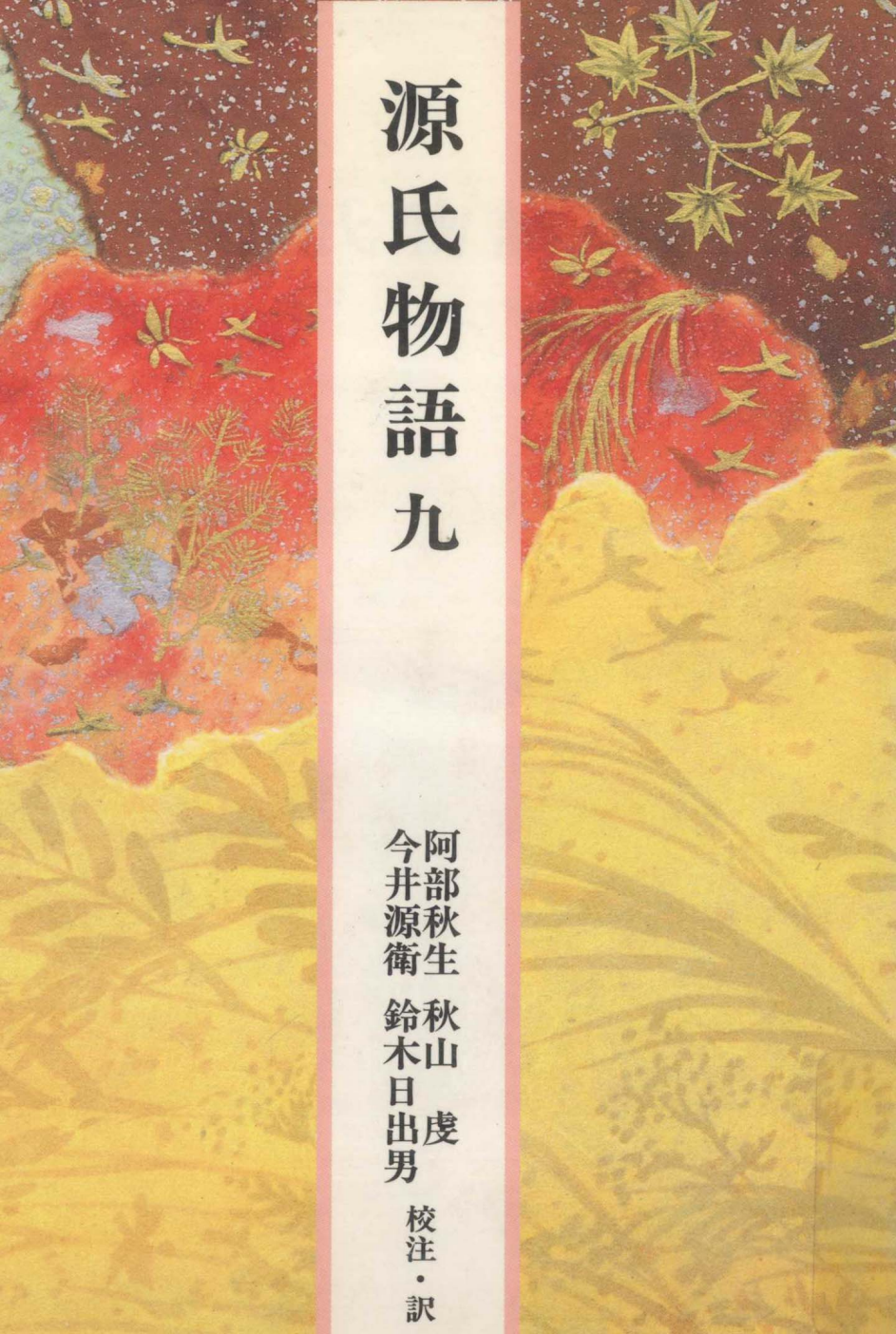




源氏物語 九

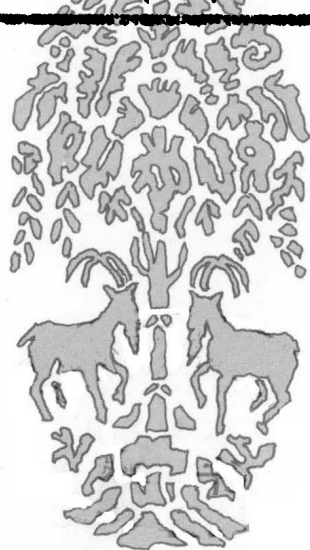
阿部秋生
今井源衛
秋山 虔
鈴木日出男

校注・訳

阿部秋

・ 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章



小学館

完訳 日本の古典 第二十二巻 源氏物語(九)

一九八九年四月一日 初版第二刷発行

校注・訳者 阿部秋生 秋山 虔
今井源衛 鈴木日出男

発行者 相賀徹夫

印刷所 凸版印刷株式会社
発行所 株式会社 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋二一三一

振替口座 東京八一二〇〇番

電話 編集(〇三)二三〇一五一四一 業務(〇三)
二三〇一五三三三 販売(〇三)二三〇一五七三九

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。
・本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。
Printed in Japan

A Abe K.Akiyama 1988 (著者検印は省略)
© GImai H.Suzuki いたしました)
ISBN4-09-556022-3

目次

凡例	三
早蕨	原文 現代語訳 一一 二三
宿木	三三 三八
東屋	一三五 二九七
校訂付記	二〇四
卷末評論	三四五
付録	
引歌一覧	三六三
各巻の系図	三八三
官位相当表	三八八

口絵目次

源氏物語早蕨図色紙	1
源氏物語絵巻／宿木	2
源氏物語絵巻／東屋	4

〈装丁〉 中野 博之

凡 例

一、本書の本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（平安博物館所蔵、通称「大島本」）等を底本とし、これを『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本と、その他数種の青表紙諸本によって校訂したものである。河内本・別本の本文は参考として掲げるにとどめた。

一、第九冊（早蕨・東屋）の底本は、早蕨の巻には定家本を、宿木・東屋の巻には大島本を用いた。各巻に使用した底本・校訂諸本は、「校訂付記」の巻名の下に略号によって列挙した。

一、本文は、底本をできるだけ忠実に活字化することを期したが、変体仮名を普通の仮名に、仮名づかいを歴史的仮名づかいに改めることをはじめ、次のような操作を加えた。

1 段落を分けて改行し、大きい段落には番号と見出しとを加えた。また句読を切り、濁点を加え、会話などを「」でくくり、肩書を付した。

2 宛字は普通の表記に戻し、補助動詞の「たまふ」「はべり」「きこゆ」「たてまつる」などは、仮名書きに統一した。これらのほかにも仮名書きにしたものがある。

大正し↓大床子だいしやうじ 外尺↓外戚げさく 五↓碁ご 木丁↓几帳 本上↓本性ほんじやう せふ正↓摂政せふしやう あか
月↓暁

思給る↓思ひ（う）たまふ（へ）る 侍なり↓はべなり・はべるなり 也↓なり

猶・尚↓なほ 中↘↓なかなか

3 「↘」「↘」などの繰返し記号は用いず、文字を繰り返して表記した。また、「↘」「↘」を「々」に改めたものもある。

つ↘↓つつ やう↘↘↓やうやう

日↘↓日々 人↘↘↓人々 御方↘↘↓御方々

4 漢語の韻尾の m・n 音の区別は決定しがたいところもあるので、原則的には n 音（「ん」表記）に統一したが、例外もある。

三位（サンミ） 散位（サンニ） 汗衫（かざみ） 竜胆（りんだう）
（または「りうたむ」）

5 底本に二通りの表記がある同語は、底本の形にしたがった。

かるしーかろし（輕し） かぞふーかずふ（数ふ） うまるーむまる（生まる） うめーむめ（梅）

まなーまんなーまむな（真字） んーむ（助動詞） なんーなむ（助詞） なめりーなむめりーな

んめり ついしやうーついそ（追従） こきでんーこうきでん（弘徽殿） じようきやうでんー

そきやうでん（承香殿） おほいどのーおほと（大殿）

一、底本を校訂した部分は、「校訂付記」に掲げ、校訂の拠りどころとした諸本の略号を記した。

一、各帖の本文冒頭にある巻名は、底本の題簽の文字を活字体になおして用いた。

一、脚注については、日本古典文学全集『源氏物語』の注をふまえてもいるが、なお次のような配慮のもとに執筆した。

1 簡潔・明快であることを旨とし、なおかつ脚注だけで十分本文が読解できるように心がけた。

2 本文の見開きことに注番号を通して付け、その注釈は見開き内に収めるように心がけた。だが、スペースの関係で、時には前のページあるいは後のページの注を参照するよう、↓を付してページと注番号を示した。

3 『源氏物語一〇八』（第一冊と第八冊）を参照すべきことを示す場合は、次のようにした。

↓帚木①四九〇（本文を参照する場合） ↓紅葉賀②五七〇注三（脚注を参照する場合）

↓須磨③④（本文中の太字見出しの章段を参照する場合）

4 語釈は、スペースの許すかぎり、語義・語感・語法・文脈・物語の構成・当時の社会通念などにもふれながら、読解・鑑賞の資となるような心がけた。

5 段落全体にわたる問題、とくに鑑賞・批評などには、◆を付して記した。

6 引歌がある部分の注は、当該引歌とその歌が収録されている作品および作者とをあげるにとどめ、引歌の現代語訳と解説とは、巻末付録「引歌一覧」に掲げた。

7 登場人物・官職・有職故実については、本文の読解・鑑賞に必要な範囲内にとどめたので、巻末付録の「系図」「官位相当表」をも併せて参照されたい。

一、現代語訳については、次のような配慮のもとに執筆した。

1 原文に即して訳すことを原則としたが、また独立した現代文としても味わい得るようにつとめた。

2 そのために、必要に応じて、(1)主語・述語の補充、(2)語順の変更、(3)会話・独白（モノローグ）・内心語・引用における「」の添加、(4)文中の言いさしの言葉には下に補いの言葉の付加などの工夫をした。

3 和歌は、全文を引用したのち、その現代語訳を（ ）内に示した。

4 見出しは、本文に付した見出しと同じものを現代語訳の該当箇所につけた。

5 原文と現代語訳との照合の検索の便をはかり、それぞれ数ページおきの下段に、対応するページ数を示した。

一、卷末評論は、本巻所収の巻々に関連して問題となるテーマを一つとりあげて論じた。

一、卷末付録として、「引歌一覧」「各巻の系図」「官位相当表」を収めた。

一、本巻の執筆にあたっての分担は、次のとおりである。

1 本文は、阿部秋生が担当した。

2 脚注は、秋山虔と鈴木日出男が執筆した。

3 現代語訳は、秋山虔が執筆した。

4 卷末評論は、今井源衛が執筆した。

5 付録の「引歌一覧」は、鈴木日出男が執筆した。

一、その他

1 口絵の構成・選定・図版解説については田口栄一氏を煩わした。

2 口絵に掲載した『源氏物語絵巻』『源氏物語図色紙』については徳川黎明会の協力を得た。

源
氏
物
語

早^さ

蕨^{わろび}

卷名 新年、蕨^{うず}などを贈^くつてよこした山の阿闍梨^{あせり}に、中の君が「この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰の早蕨^{うず}」と返歌^{へんか}したことによる。

梗概 悲しみの里にも春は訪れる。山の阿闍梨から蕨^{うず}などが届けられた。さまざまの物思いに面瘦^{おもやう}せした中の君の風情^{ふうせい}は亡き大君の面影に通う。女房たちは、中の君が蕨^{うず}と縁^{ゆかり}のなかつたことを残念に思わないではいられない。一方、蕨^{うず}は、匂宮との気心の知れた語らいに、やるせない思いをわずかに晴らすのである。

匂宮は、二月上旬に中の君を京へ迎え取ることとした。中の君は宇治の山里を捨てがたくも思うが、といってここに籠^{こも}りきることもならない。憂^{うれ}えに沈^{しづ}む中の君に、蕨^{うず}はこまやかな配慮を示した。上京の前日、宇治を訪れた蕨^{うず}は懐旧の情にひたるが、しかしその胸中には、中の君を匂宮に譲^{ゆづ}ったことへの悔^くいがわだかまっていた。中の君は、上京を喜び浮き立つ女房たちをよそに、ひとり出家して宇治に居残ることにした弁との別れを惜しみながら、憂愁と後悔の思いを抱きつつ、上京した。

二条院に移った中の君に、匂宮の愛情はこまやかである。後見人としてその幸運を願う蕨^{うず}は、それを喜びつつも一方では複雑に揺れ動く心を禁^こじ得ない。花盛りのころ、蕨^{うず}は二条院を訪れ、中の君とも対面した。匂宮は、わが妻と蕨^{うず}との親しさに不安を感じもする。中の君には、そのような蕨^{うず}、匂宮の心々が煩^{わづ}わしかった。

〈蕨二十五歳の春〉

さわらび

〔一〕春の訪れにも中の君の傷心癒えず

敷^{やぶ}しわかねば、春の光を見たまふにつけても、いかでかく

ながらへにける月日ならむと、夢のやうにのみおぼえたま

ふ。行^三きかふ時々に従ひ、花鳥^{はなどり}の色をも音^ねをも、同^四じ心に起き臥^ふし見つ、は

かなきことをも本末^{もとすえ}をとりて言ひかはし、心細き世のうさもつらさもうち語ら

ひあはせきこえしにこそ、慰^{なぐさ}む方もありしか、をかしきこと、あはれるふし

をも、聞き知る人もなきままに、よろづかきくらし、心ひとつをくだきて、宮^六

のおはしまさずなりにし悲しきよりもややうちまさりて恋しくわびしきに、い

かにせむと、明け暮るるも知らずまどはれたまへど、世^七にとまるべきほどは限

りあるわざなりければ、死^ハなれぬもあさまし。

阿闍梨^{あざり}のもとより、「年^九あらたまりては、何^{一〇}ごとかおはしますらむ。御祈禱^{ごいのり}

はたゆみなく仕うまつりはべり。今は、一^二とこころの御事をなむ、やすからず念

一 大君死去の翌年、中の君二十五歳の春を迎えたが、めぐり来る春の陽光が、中の君の悲傷の心を照らし出す。「日の光敷しわかねば石上^{いそのかみ}ふりにし里に花も咲きけり」〔古今・雜上 布留^{ふりう}今道^{いまみち}〕。

二 大君を追って自分も死ぬべきだったのに、の氣持。「夢」に注意。

三 四季のめぐりの、その折その時に身をゆだねる受動的な人生であるとする。↓薄雲^{うすぐも}〔六三三〕注元の歌。『紫式部日記』寛弘五年十一月の回想記にも同様の叙述。

四 大君との心の交流が自分（中の君）の生きる支えだったとする（↓椎本^{しいもと}図一六八頁三行）。「本末」は和歌の上句、下句。

五 以下、大君死後の生きがたき。

六 父の死を大君と慰め合ったが、大君の死後の孤独には堪えがたい。

七 寿命は前世からの定め、の意。冒頭「いかでかく」に照応。

八 中の君の心中に即した地の文。

九 大君の死の悲嘆の年も明けたので、の氣持をこめた年頭の挨拶。

一〇 中の君の無事延命のための。二 中の君をさす。

じきこえさする」など聞こえて、^{わらひ}蔵つくづくしをかしき籠に入れて、「これは童^{わらわ}への供養^ミじてはべる初穂^{はつほ}なり」とて奉^{たて}れり。手はいとあしうて、歌は、わざとがましくひき放ちてぞ書きたる。

阿闍梨「君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初蔵^{はつぞらひ}なり

御前^{ミマエ}に詠^よみ申さしめたまへ」とあり。大事^{だいじ}と思ひまはして詠み出だしつらむと思せば、歌の心ばへもいとあはれにて、なほざりに、さしも思^{おも}さぬなめりと見ゆる言の葉をめでたく好ましげに書きつくしたまへる人の御文よりは、こよなく目とまりて、涙もこぼるれば、返^へり事書かせたまふ。

中の君^ニこの春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰の早蔵^{さわくらひ}使^{つかひ}に禄^{ろく}とらせさせたまふ。

いと盛りににはひ多くおはする人の、さまぎまの御もの思ひにすこしうち面^{おも}瘦^やせたまへる、いとあてになまめかしき気色^{けしき}まさりて、昔^{むかし}人にもおぼえたまへり。並びたまへりしをりは、とりどりにて、さらに似たまへりとも見えざりしを、うち忘れては、ふとそれかとおぼゆるまで通ひたまへるを、女房「中納言

- 一 土筆^{つひ}の異名。阿闍梨からの時節時節の贈物(→椎本^{シイホン}一六一頁)。
- 二 寺で雑役に奉仕する下僕。
- 三 「供養^ミず」は仏法僧に物を献ずる意。「初穂^{はつほ}」は收穫した作物を、まず神仏や主君に捧げること。
- 四 僧なので仮名になじまぬ筆跡。
- 五 一字一字を離した放ち書きか。
- 六 「君」は亡き八の宮。「摘み」「積みの掛詞、春草を摘むのが多年の習慣になっている意。前^{マエ}の「今は、一ところの……とも照応し、今後も変らぬ交誼をと願う歌。
- 七 取次の女房に依頼する趣。
- 八 中の君の心中。日ごろ歌など詠まぬ阿闍梨の苦吟ぶりを想像。
- 九 以下、句宮の言葉巧みな艶書を対比的に想起し、あらためて阿闍梨の誠実に感動する。
- 一〇 女房に返書を書き取らせる趣。
- 一一 「形見」「筐^{かたがは}」の掛詞。父宮の死去の地の宇治山で摘んだ形見の早蔵なのに、見せたい大君はすでに故人になったと嘆く歌。卷名の由因となった歌。

殿の、骸^{から}をだにとどめて見たてまつるものならましかばと、朝夕に恋ひきこえたまふめるに。同じくは、見えたてまつりたまふ御宿世^{すくせ}ならざりけむよ」と、見たてまつる人々は口惜^{くも}しがる。

かの御あたりの人の通ひ来るたよりに、御ありさまは絶えず聞^ききはしたまひけり。尽きせず思ひほれたまひて、新しき年とも言はずい^いやめになむなりたまへると聞きたまひても、げに、うちつけの心浅さにはものしたまはざりけりと、いとど、今ぞ、あはれも深く思ひ知らるる。

宮は、おはしますことのいとど^いころせくありがたければ、京に渡しきこえむと思したちになり。

〔二〕蕨、匂宮に嘆き訴える 中の君へ心寄せ
内宴^{ないえん}など、もの騒がしきころ過ぐして、中納言の君、心^{こころ}に

兵部卿宮の御方に参りたまへり。しめやかなる夕暮なれば、宮、うちながめたまひて、端近^{はぢ}くぞおはしましける。箏^{そう}の御琴^{ごこと}掻き鳴らしつつ、例^{れい}の、御心寄せなる梅^{うめ}の香^かをめでおはする、下枝^{しげ}を押し折りて参りたまへる、匂ひのいと艶^{えん}

三 中の君の盛りの華やいた美貌。
三 大君との死別や、匂宮との途絶えなどと思う。その苦悩の面影がかえって美貌を際だてる。

四 亡き大君。

五 大君と中の君の個別的な相違（↓橋姫^{ハシメ}図九三^頁・椎本^{シズモト}図一七一^頁・総角^{そうかく}図二六^頁）。死別後は逆に血縁ゆえの共通性^{きうつうせい}が際だつ。
六 ↓総角^{そうかく}図二五九^頁七行。

七 蕨と中の君の結ばれないことを、女房たちは宿運として嘆く。

八 莊園に来る蕨の従者（椎本^{シズモト}図一六五^頁）や、この女房に通う蕨の従者（総角^{そうかく}図二四三^頁）など。

九 蕨と中の君が情報を交し合う。悲しそうに涙ぐむ蕨の顔つき。

二 中の君は、夫匂宮の薄情さを念頭に、蕨の誠実さを思う。「げにけり」は気づき納得する語法。

三 親王ゆえの行動の不自由さ。

四 正月二十一日前後の子の日の、仁寿殿での宴。作詩などする。

五 大君を喪った悲しみ。蕨には、匂宮以外に訴える相手がない。

六 例によつて。匂宮は蕨の趣味に熱心。↓匂宮^{きうきう}図一九^頁。

にめでたきを、をりをかしう思して、

句宮 折る人の心に通ふ花なれや色には出でずしたに匂へる

とのたまへば、

薫「見る人にかごとよせける花の枝を心してこそ折るべかりけれ

わづらはしく」と戯れかはしたまへる、いとよき御あはひなり。

こまやかなる御物語どもになりては、かの山里の御事をぞ、まづは、「いかに」と宮は聞こえたまふ。中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しきこと、そのかみより今日まで思ひの絶えぬよし、をりをりにつけて、あはれにもをかしくも泣きみ笑ひみとかいふらむやうに聞こえ出でたまふに、まして、さばかり色めかしく、涙もろなる御癖は、人の御上にてさへ、袖もしぼるばかりになりて、かひがひしくぞあひしらひきこえたまふめる。空のけしきも、また、げにぞあはれ知り顔に霞みわたれる。

夜になりてはげしう吹き出づる風のけしき、まだ冬めきていと寒げに、大殿油も消えつつ、闇はあやなきたどたどしきなれど、かたみに聞きさしたまふべ

一 「花」は白梅。「折る人」薫が秘かに中の君を慕うのかと、その下心を疑う歌。↓総角図二六六頁末。

二 「見る人」は自分(薫)。「かごと」「香」の掛詞。言いがかりをつける厄介な花なら、折るのも気をつけるべきだったと切り返した。

三 語り手は、対立しかねない二人を、睦まじい仲と語りおさめる。

四 宮は、年末に中の君に手紙を贈った。それ以来の近況を聞か

五 四季折々につけての思い出。

六 悲喜こもごも。当時の成語。

七 薫にもまして。句宮の、好色者に特有の多感で涙もろい性格。

八 「わが身から憂き世の中と名づけつつ人のためさへ悲しめるらむ」(古今、雑下、読人しらず)。

九 話し合いがあるように。

一〇 初春の外景を取り込み、心象風景として形象。「霞」が涙を象徴。

二 以下も、悲嘆をかたどる心象景。「内宴」を過ぎたばかりの一月末で、春まだ浅い荒涼たる風景。

三 ↓若菜上四五三頁注九の歌。

三 心ゆくまで語り合えぬうちに。

四 薫と大君が潔白な仲でいたこ